

論 説



品質工学会「ビジョン30に向けた活動報告」(1)

—ビジョン35を構想するためのビジョン30長期計画の活動の総括と今後の課題—

*Robust Quality Engineering Society "Report on Activities toward Vision 30" (1)
— Summary of the Activities of the Vision 30 Long-term Plan for Envisioning
Vision 35 and Future Tasks —*

吉澤 正孝*

Masataka Yoshizawa

1. はじめに

本稿は2017年に制定されたビジョン30に向けて計画された長期計画の活動報告である。5年間の活動を振り返り、良いところは継続・加速し、うまくいかなかったところは課題とし、学会運営のPDCAを回すために総括を行うことを目的としたものである。学会として長期に取り組む活動をはじめて行ったことでもあり、そのきっかけを述べてみる。

1993年、それまでに田口玄一博士を中心とした品質工学の研究をしてきた有志が集まり、任意学術団体として品質工学フォーラムが設立された。1996年には、日本学術会議から学術団体として認められ、名称も品質工学会と改め学会活動をしてきた。2016年の秋には設立25周年に向けて、学会活動をより魅力的にすることに加えて、社会的責任を持った活動をするために、任意学術団体から一般社団法人として登録し、活動を行うことにした。法人にはそれなりの責任が伴う。そこでこれからの活動を明確にするために、品質工学フォーラムの設立趣旨を見直し、事業内容を新たに定めた。それに並行して、25年間の活動を総括した結果、谷本勲会長(当時)から、次の課題が提示された¹⁾。

- 1) 田口玄一亡き後の技術開発をどうするのか
- 2) 矢野宏が提示したエコシステムをどう引き継ぐか

3) 結果として会員増をどう達成するか

これらの課題を解き、一般社団法人として役割を明確にするために、学会の理念と共有価値を定め、長期に目指すところを設定して「理想を目指して新たな品質工学の道」を制定した。この理念と共有価値は、2016年度から検討し、2017年6月22日、23日で開催した一般社団法人になってはじめての品質工学研究発表大会で決意表明を行った。同時に大会参加の会員にリーフレットにまとめ配布し思いを共有化した²⁾。(現在は、品質工学会のホームページでも見ることができる。)

2. 課題解決のための活動企画

2.1 これまでの活動の振り返りと課題解決の概要

品質工学の研究は、それまで田口玄一を中心に(一財)日本規格協会や(一社)中部品質管理協会に設置された品質管理研究会で精力的に行われてきた。その成果は、1988年から日本規格協会により漸次『品質工学講座』7巻が出版され、品質工学が公に認知されることとなった。その講座の出版を機会とし、多くの方が品質工学を学び、実践し、より高いレベルを目指して研究するための情報交換とその成果を収集する場の必要性が認識され、1993年に品質工学フォーラムが発足した。それ以来、今日まで活動してきた。その間、共同創立者であった馬場幾郎や創立者の田口玄一が逝去し、実際の活動を推進してきた矢野宏博士も研究活動を継続できなくなる状況になった。25年を経過しつつある2016年に、

*クオリティ・ディープ・スマーツ(責)